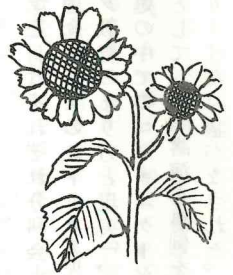


# 仙台司教区

# 教区事務所だより



(第 34 号)  
昭和55年8月1日

刈り入れは多けれど  
働く人は少なし

### ▲一粒会の動き▼

一粒会という名前の由来については、次のような話があった。

「長崎の信者の間には、昔から、「ひとつぶ会」と呼ばれる美しい習慣があった。それは信者の各家庭では、三度の食事の度毎に、米粒をまず家族の人数分だけ別の容器に入れ、少したまと、主任神父様のところに集め、更にそうして集まったものを司教様のもとに送って、大浦の神学校で勉強している神学生達の日々の糧にして頂いた」(横浜教区一粒会会報第26号)と。自分達の中から生まれた司祭召命の芽を、自分達の小さな祈りと奉獻によって育てていく姿がよくうかがわれる。

この動きが、戦後、各教区にたたり、信徒は毎日一円と射禱をささげる「一粒会」として発展したのだから。

戦後司祭となった仙台司教区の多くの神父様方は、物心共に大方この一粒会の援助をうけており、一粒会の動きは、あまり表面に目

立ってはいないが、大きな力だった。

教区事務所だより第31号は、「どうなる7年後」と題して現在の司祭の老齢化と減少傾向について問題提起をしているが、祈りと献金による一粒会の使命の重大さを改めて考えざるをえない状況を迎えているように思う。

去る3月23日、仙台司教区一粒会委員の第2回の会合が持たれた。一粒会の名前の由来が示すように、一粒会を純粹に信徒による信徒のみの組織ととらえてその組織化への胎動と促進の動きが見られたのは力強い。

ちなみに、仙台司教区一粒会委員会のメンバーは左の通りである。

- 委員長 斎藤 石雄 (暫定)
- 委員 太田 五郎 (青森代表)
- 長谷川 恒三 (岩手代表)
- 佐藤 英樹 (宮城代表)
- 古田 繁男 (福島代表)
- 遠藤 宗司 (事務)
- 吉田 昌民 (会計)

おめでとう!

ゴンザレス師  
ー日本へ帰化ー



会津若松教会主任、ホアン・アルトゥロ・ゴンザレス師は、6月18日(法務省告示第二三四号)付をもって、帰化が許され、念願かなって、めでたく日本人となった。姓名は、和泉邦安(イズミ・クニヤス)。名前の邦安は、スペイン名ホアンを当てたもの。姓の和泉は、平和と生命の源である福音に由来を求めたものである。

師はメキシコ国メキシコ市に生まれ、外国宣教を志してグアダルペ会に入会。昭和45年に来日。日本語勉強の後、会津若松に赴任、今年7年目になる。

師の持論であるキリスト教の土着化のため、自ら一步を進めたものといえよう。

### 司教様の日程

- 7月11日 カトリック博愛院常任司教委員会
- 13日 司牧評議会役員会
- 14日 邦人司祭団役員会
- グアダルペ宣教会本部(須賀川)新築上棟式
- 18日 中央協議会財務委員会
- 24日 YBUセンター落成祝別式
- 25日 スペルマン病院理事會
- 8月25日 邦人司祭団月例会

※ ※ ※ ※

老人に  
キリストの喜びを



カトリック老人福祉協会全国大会

カトリック老人福祉施設協議会(会長・本間重治神父)の本年度の全国大会及び総会が、5月21・22日、松島を会場に開かれた。

大会では「終末看護」について仙台教区カトリック医師会事務局長星安次郎氏が、二日目は「カトリック老人福祉施設の基本方針」について函館「旭ヶ岡の家」園長F・グロイド神父、「障害者の思い」と題し「ありのまま舎」の山田寛之氏がそれぞれ講演し、多大の示唆と感銘を与えた。大会終了に当たり、参加者全員が、「いと小さき人々であるお年寄りの真のしあわせのため、キリストの心を心とし、愛と尊敬をもって、祈りのうちに、一層彼らに仕え励んでいく」ことを大会決議として採択し、2日間の大会を終了した。

グアダルペ会本部建物新築



会津若松地区並びに白河、須賀川地区を担当しているグアダルペ会では、かねてから、交通の便のよい東北本線沿いに拠点を持ちたい意向であったが、同会の日本来日25周年も記念して、須賀川教会敷地内に、本部建物を新築する運びとなった。

7月14日(月)、仙台教区長・佐藤司教により上棟式が挙行された。建設は安藤建設(株)が当たり、総工費約二千万の予定である。

第14回

カトリック児童施設協会

全国会議 仙台で



第14回カトリック児童施設協会全国会議が、去る6月16・18日の三日間、仙台市のニューシテイ・ホテルを主会場にして開かれ、全国約50施設の施設長、中堅職員105名が集まり、「施設で子どもをよく育てるには」というテーマで討議を重ねた。

カトリック児童施設協会は全国4ブロックに分かれ、毎年各ブロックの持ちまわりで全国会議が開かれ、今年は東北ブロック担当で仙台開催となったのである。

第一日の開会のミサで、佐藤司教は歓迎の言葉と共に、飢える人、裸の人、病む人の世話をしようとする仕事、この社会からなくなるのが理想であるが、現実にはそのような仕事が必要であると説き、福祉の仕事に従事する参加者を励まされた。次いで、前京都教区長古屋義之司教が、「互いの心をつめ合って」という演題で、人間は神の似姿であるということから説きおこし、約2時間わたって、子どもを育てるための基本的な心構えを話された。

第二日、第三日はそれぞれ分科会と全体会がもたれ、「理念としてのカトリック児童観」、「カトリック教育のあり方と現実」、「職員の集団的対処の中でのコミュニケーション」などを論点として、基調講演と事例をもとに、テーマを掘り下げた討議がなされた。

十 アンドレ・

フォルテン師 逝く

昭和25年来日以來、仙台司教区の各地で、宣教、司牧活動に従事し多くの人々から愛されたケベック宣教会のアンドレ・フォルテン師が、去る7月8日午前4時15分、カナダ・ケベック会本部付病院でハイガンのため、帰天された。生前の活動は次のとおりである。

明治45年2月15日 カナダに生まれる  
昭和11年6月24日 司祭叙階、同年中国に渡り長い宣教活動にたずさわる  
昭和25年 来日

- 25年〜37年 弘前教会主任
- 37年〜40年 八戸・塩町教会主任
- 40年〜46年 仙台・一本杉教会主任
- 46年〜49年 カナダに一時帰国
- 50年〜51年 青森・浪打教会主任
- 51年〜52年 仙台・一本杉教会主任
- 52年〜54年 川崎市溝ノ口教会主任
- 54年 病氣のためカナダへ帰国
- 55年7月8日 帰天 享年68歳

追悼ミサは7月12日(土)午後3時から一本杉教会で、土井司教総代理をはじめ市内の8名の司祭方の共同ミサで行われた。師の突然の死をいたむ信者が聖堂一杯にあふれ、6月にカナダで師を見舞ったばかりの加藤豊子さんの弔辞は、師の人柄をしのばせ涙をさそった。なお、鎮魂ミサは、師が生前最も長く働かれた弘前教会で、7月13日(日)午後6時30分かつ挙行された。



### 私たちの福音宣教

#### △宮城県信徒大会▽

去る7月6日(日)、仙台白百合学園を会場に、年に一度の宮城県信徒大会が開催された。2年前から「私たちの福音宣教」というテーマで行われているが、今年はその3年目である。今年も前年と異なり、パネルディスカッションの形式で行われた。始めに全員で開会の祈りをし、続いて大会委員長猪岡近男氏により「信徒大会を契機に、原点に立ち返って、自己の信仰を考えよう」と開会の挨拶があり、又、佐藤司教から、「年に一度顔を合わせる喜びもお互いのかかわりに大きな役割を果たすものであり、この信徒大会の上に神の祝福を祈り求めよう」とのはげましの言葉を頂いた。続いてパネルディスカッションが次の4名の方々により話題提供があり、その後それぞれ活発な意見交換が行われた。

- \* 子どもの生活現実と教会 近藤義忠氏
- \* 若者と宣教 藤原洋一氏
- \* 職場におけるキリスト者としての姿勢 菊地金男氏
- \* ミサへの参加 和野邦義氏

中でも青少年の学校における部活動と教会参加との間の問題点が多く、父親の権威で絶対的にミサに参加させるといふ考え方と一時的に部活動を選んでも本質的な所で何が大切かを理解できる「時」を待つといふ考え方の二つがあり、日本社会の現状と教会、という事で多くの問題を考えさせられた。又、信仰

教育の点でも第二バチカン公会議後の信仰教育がどの程度、各小教区で徹底されているのか疑問とするような質問もあり、各教会で一層浸透させる必要を痛感させられた。

全体集会の後、別室で研修やレクリエーションをしていった幼小、中高生121名も合流し、総勢400余名が佐藤司教を中心に、教会音楽のつどいの伴奏で感謝のミサが献げられた。

今年も仙塩地区8教会を始め、宮城県のほとんどの教会から参加者があり、名実共に県レベルの信徒大会になりつつあることを喜び合った。(なおパネラーの要旨は次号で掲載の予定)

#### 福島県

#### 信徒連絡協議会委員会開催

去る6月15日(日)、午後1時30分から、郡山カトリック教会において福島県信徒連絡協議会の委員会が開かれ、福島県下の各教会委員及び神父様方が出席した。この日の主な議題は次のとおりである。

☆第11回県カトリックの集い実施について

テーマ「社会に対応する信徒の役割」(カトリックの本質から見て)

時 10月10日 10～15時

場所 会津若松ザベリオ学園

☆提案事項として浜通り地区協議会から次の二点が提案された。

- 協議会に広報部会(委員会)を設けたい。(理由)福音の宣教にマスコミの利用は不可欠で、特に教区でもその必要を感じているが、まず仙台教区の「教区だより」を充

実させ、全信者が喜んで読めるものにした。推進役として各県毎に広報担当者が任命されたが、全県の団体のある所では、その団体から担当者を推薦し、広報活動と、教区広報部門との連絡協力に当たらせたい。

- 協議会に一粒会部会(委員会)を設けたい

昨年から教区一粒会には各県に一粒会担当者を指命し、運営は会員の手で行う事を決めた。福島県としても一粒会の事業に協力し、これを推進するため一粒会部会を設けることを提案する。

#### 一粒玉の目方は?

#### △小名浜教会▽

小名浜教会一粒会では、子供でも献金出来るようにジュース等の空きカンを利用し献金カンを各家庭に配っている。この程一年間の集計をしてみたところこんな結果が出た。カン25個で合計一三、五三五円也

内訳 一円玉三、六七〇枚 五円玉五、九三枚  
 十円玉二、九五枚 五十円玉二、一枚  
 百円玉 二、九枚

ところで、勘定が面倒なので目方で概算したら一円玉百枚で一〇g(一枚一・一g) 五円玉百枚は三八〇g、十円玉百枚四四〇g、この割合で行くと全部で一三、五二一円(五十円百円は枚数で数えた)だったが、郵便局で機械にかけたら14円の差が出た。教会の量りはg以下わからないからであろう。

神様は大人の百円よりも子供の1円玉をお喜びになったでしょう。(古田広報委員)

1980  
教区目標

聖書に基づいた  
家庭における  
子供の  
信仰教育



岩手県では、昨年から子どもの信仰教育について共に考える動きがあり、種々の活動が行われている。その現状について、岩手カトリック・センターの報告を紹介し、各県の参考になれば幸いと思う。\*\*\*

「家庭における  
子供の信仰教育の手引」

編集状況について

岩手カトリック・センター

昨年の司教教書「子供達の幸せのために」の呼びかけに応じて、岩手県内でも、家庭における子供の信仰教育のあり方を考えてみようという動きが起こり、できれば幼児をもつ父母のための手引書も作ってはどうかということになり、センター内にその準備委員会を設けて活動を続けてきた。

第一年目の昨年は、県内各教会毎に、父母が集まり、いままで幼児の信仰教育をどんなふうにやってきたか、現在どのような問題があるか、今後どうすればよいだろうかなどに

ついて話し合うことからはじめた。そこで出てきた話の概要を文書にまとめてセンターへ報告してもらった。このことを通じて、話し合いに参加した父母達はもとより、それを伝え聞いた人達にもさまざまな反省を促し、また信仰教育の大切さを意識させた点で相当の効果があったものと思われる。

第二年目の今年は、右の各教会からの報告書を検討し、そこに見られる疑問点を拾い出し、それを体系化して手引書を構成する作業を進めることにした。福音に基づく信仰教育の理念についてツィゲル師の説明を聞き、それに委員達の実際の体験に基づく見解を加えながら、「質問」―「回答」という表現形式で文章をまとめることにしている。

その内容は、

- ① 信仰教育の目的
- ② 信仰教育と祈り
- ③ 日常生活における信仰教育
- ④ 家庭の典礼を通しての信仰教育

という四章に分け、各章につき10問程度の質問項目を設定し、それに回答ないし解説(一〜二頁)を付す計画である。これは、元来非常に難しい作業であるうえ、委員達が皆素人にかつ多忙な人達であるため思うように進捗しないている。それでも60〜70%程度までは進んだので、今年の秋ごろには完成する見込みである。

(文責 菅野)

御礼と報告

ベトナム難民と共に

笹気直哉神父

4月14日に来日した第一陣のベトナムの方は、皆様の援助により、健康も次第に回復してきた模様です。

私共は去る4月29・30日と6月23・24日の二回、現地宮川海の家に行き彼らと会って参りました。現在までの状況を簡単にお知らせいたします。

5月に入り、子ども達はカトリック幼稚園や地元の高浜小学校に通い始めました。日本との交流も子供を通じて自然に行われているようです。大人の方々は、6月から就職先が決まり、慣れないながらも意欲的に仕事に打ち込んでいる様子です。

そのような中で、6月18日の早朝、新たに32名の方々が海の家に到着しました。この方々は、中部ベトナムで、6月5日、長さ8m、幅2mの小舟に乗ってベトナムを脱出し、6月12日南シナ海において漂流中を、クウェートの貨物船に救助されました。この第二陣の方々は、全員カトリック信者で、ある婦人はマリア様の御像をしっかりと胸に抱いておられたとの事です。第一、二陣を加えると現在57名です。以上のような状況ですので、今後も日用品、援助金の御協力をいただければ幸いです。

尚詳細については、教区事務所(日、祝日を除く午前9時から午後5時まで)笹気までお問い合わせ下さい。



\*\*\*マザー・テレサ \*\*\*  
 \* 南へ、北へ \*  
 \*\*\*映画を通して福音宣教 \*\*\*

昨年から全国的に、映画「マザー・テレサとその世界」が上映され、多大な反響を与えているが、ニュースの遅い東北各地でも種々の団体が映画会を開き好評を博している。

カトリック系学校では、青森2、岩手2、福島6、宮城5、カトリック系外団体では、青森8、福島3、宮城3。教会関係は青森4、岩手3、福島4、宮城1で、昨年だけで仙台教区では41回の上映、参加者一万六千七百八名に及ぶ。ただ、小教区の教会が映画会を開くためには多くの困難があるが、青森、岩手、福島では、いずれも他教会合同、又はプロテスタント、一般の福祉団体、県や市の自治体との共催、後援を受けて開催し、成功に導いている。

次に紹介するのは、映画会の感想と、釜石教会が映画会を開くまでの経過である。

※「去る5月28・29両日、我が宮古教会に於て『マザー・テレサとその世界』の映画会が開かれ、300人以上の人々に見ていただき、一般の人々にも深い感動を与えました。インドの暑い世界、最低の居住区で、貧しく路上で生まれ、路上に住み、そしてだれにも相手にされず、虫けらのように又路上で死んでいく人々、この忘れられ見捨てられた人々を、献身的に奉仕するマザー・テレサと修道女達。この人々の姿に聖書にあるイエスの行動を見る思いで

した。映画会が終わり、主任司祭の挨拶に「日本は物質的に不自由なく、満足した社会でありながら、他人を助ける思いやりの心が不足してはいないだろうか」とありました。将来我が国も高齢者社会が来る事が予想されますが、孤独な老人や病気の人々のために、もっと何か考えねば、と反省させられました。」

(宮古教会 大戸道文)

※「マザー・テレサの人間愛と心温まる優しさ」と厳しさ、崇高なほほえみ、生活姿勢等、脳裏から離れません。頭の下がる気持ちで一杯です。信仰心のある方々の心の持ち方と勇氣と力はどこから湧いてくるのでしょうか。

私の町内には教会があり、買い物かごを持って毎日通りますが、門前で必ず一礼しますと、すがすがしい気分になり、いやな気持ちがあっても耐えていける心が知らず知らず身につけてしまいました。教会の影響が、こうして私に、考え方の視点を変えさせて下さったことを感謝しています。(宮古市、中居和子)

映画会上映までの経過



昨年、クリスマスイブの時、当教会恒例の聖劇の終わりに、一人の若い求道者が東京のデパートで見たマザー・テレサの写真展について情熱的に話してくれたのが、釜石教会の信者達とマザー・テレサとの最初の出会いであった。

次に、教会の新書置き場にその写真集が置かれ、又、盛岡の岩手カトリック・センターで行われた映画会に釜石から数名参加するな

ど、マザー・テレサへの関心は深まり、釜石市民一般の方々にこの映画を上映し福音の光を与えたい、福音宣教のよい機会となるのではないかと話になった。本年1月27日、教会委員会の中で小委員会を結成し、映画上映へのスタートを切った。度重なる委員会の後、ユネスコとの共催、そして隣の大槌町教育委員会、社会福祉協議会からも後援していただき、入場券を発売。400枚売り上げの予定が、八百数十枚と、その売り上げも大きく上回り、5月24日の映画会当日は、市民文化会館ホールは満員の盛況となったのである。

この成功の裡には宝樹寺の住職渡辺顕磨師(荒川少年少女合唱団の指揮者)の協力があつたこと、そして、神の恩寵によるものであることを深く感じ、常に主への信頼の中に生きるよう祈り、願うものである。(小野寺哲)

笑靨



「イエ、ワタシ、カナダジン!」

東仙台はオタワ愛徳修道女会のNシスター、来日して間もなく日本語の勉強で、日本人イギリス人、などという表現を学んだ。

ある日、玄関でベルがなったのでNシスターが出て見ると、二、三人の職人風の男達、彼ら顔を見合わせ、その内の一人がつぶやいた。

「ヘー! 美人だなあ!」

それを聞いたシスターN、大真面目に訂正した。

「イエ、ワタシ、カナダジン、ヨ!」

